

P6-1 高齢女性との趣味的作業 ～居室生活へ反映して6年～

○能瀬 絵美(OT)

西脇市立老人保健施設 しばざくら荘

Key word：介護老人保健施設, 認知症, (趣味的作業)

【はじめに】居室フロアでの過ごし方にもアプローチする当施設の作業療法(以下, OT)の取り組みを開始して6年が経過した(第33回近畿学会)。その取り組みのきっかけとなった1人の入所女性との作業療法は、他施設への転所と再入所を繰り返しながら続いており、95歳となった現在も生活意欲を維持し作品作りに取り組んでいる。この入所女性へ提供した趣味的作業が生活の質を維持し、認知症の進行予防に結びついたため報告する。なお報告に関して、口頭で説明し同意を得た。

【事例紹介と経過】腎盂腎炎後、独居生活困難にて、当施設初入所(6年前)。HDS-R：18点 握力：右12kg(第2指PIP関節切断)左8kg FIM：85点。車椅子移動自立であるが易疲労性で臥床傾向。リハビリには参加するものの、「あんなことさせて」と居室では文句を言って過ごす姿が目立った。居室での生活を変える必要があると判断し、居室作業として簡単なミニ花の編み図と毛糸を渡し宿題として提供したところ「編んだらできたわ」と達成感のある表情でOTにミニ花を持って来室した。他者にも丁寧に作り方を説明し楽しむ様子が見られたため、OTでは編み物を他者に教えることを役割とし、居室で過ごす自由時間にはミニ花づくりを仕事とした。その花を暖簾や壁掛け作品に仕上げる援助を行い施設に飾ることで、趣味的作業をして過ごすことが施設生活の要となった。1年後、A老健へ退所。編み物をして過ごし、半年後、数々の作品を持って当施設再入所。HDS-R：26点 握力：著変なし FIM：98点と心身機能を維持していた。週2回OTを実施しながら、居室での編み物のアドバイスなどをした。1年の入所の後、B老健へ退所。その約1年後、当施設再入所。HDS-R：23点と認知機能はやや低下していたが、ADLは著変なく、リハビリ曜日には自分で来室するなど自主的な生活を維持。OTでは語想起訓練や構成課題を行い、居室では季節

の作品作りを楽しんだ。1年後、再びB老健へ退所。1年後半後、当施設に再入所した際には、見当識・記銘力・書字・計算能力低下を認め、認知症の診断がついた(MMSE：21点)。居室では編み物をするのが減少していたため、見当識訓練、季節感のある認知機能訓練とともに、手工芸での思考訓練を提供した。その後はお正月が近くなったことを意識し、干支の置物を筆者と作ったことを懐かしむ発言が見られたため、新年の干支の置物づくりを提案。図柄を手渡す援助のみで作品は完成し、「他者にもあげて喜んでもらいたい」と編み物をする時間が増えた(MMSE：25点)。

【結果】当事例は施設入所をして7年目となるが、現在も主体性のある生活を過ごしている。関わり初期で提供した居室での趣味的作業はどの施設においても生活の要となり、筆者が編み物を提供したことの感謝の言葉をよく口にした。加齢に伴い認知症が出現してきたが、花や干支など、日付を意識してその時期に合った作品を作る習慣をつけていたことや、筆者との関わりが断続的にでも継続出来ていること、作品作りに必要な思考と構成の訓練を提供し続けたことで、認知機能はやや改善し、再度趣味的作業をして生活を楽しむようになった。

【考察】施設生活が始まった早期に、居室での過ごし方にもアプローチしたことで、受け身の生活ではなく主体性のある施設生活を長年継続できていると考える。宮永敬市(2015)は、認知症の第1段階において、QOLを保つためには、本人の自発的な行動を尊重し、できることを伸ばしていく環境調整が必要と述べている。認知症が出現した現在においても、居室での趣味的作業によってできることを高め、自発的な行動を支援することができ、認知症の進行予防に結びついていると考えられる。